法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-29

水都アムステルダム : 歴史的経験と未来へのチャレンジ

樋渡, 彩 / 岩井, 桃子 / 細川, 雅紀 / Ruyven, Kees van / 稲益, 祐太 / 根津, 幸子 / 榮, 美奈

(出版者 / Publisher)
法政大学大学院エコ地域デザイン研究所
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
205
(発行年 / Year)
2007-03

おわりに

本報告書は、オランダ・アムステルダムにおける歴史から始まり、実際の現場に身を置く人たちからの声を交えながら現代の都市開発について紹介したものである。

私自身、オランダという国と付き合い始めて早くも6年あまりが経とうとしている。水都アムステルダムとの出会いは2000年夏までさかのぼる。お酢で有名なミツカンの助成のおかげにより、17世紀に繁栄を極めたオランダの水辺都市を調査するチャンスを得たのが始まりである。この調査に参加した当時、私は修士課程に在籍していた。風車、チューリップ、ハウステンボス、近代デザイン、、、というステレオタイプのイメージとともに訪れたオランダだったが、アムステルダム市民の気さくな人柄や、古いものを大切に扱いながらも新しいものを受け入れようとする彼らの柔軟性に触れ、私はすぐにオランダという国が気に入ってしまった。恋に落ちた、と言っても良いかもしれない。結局、2001年秋から2年間のオランダ留学を経て、修士論文「アムステルダムの都市空間に関する研究」を書き上げるに至った。本報告書を編集するにあたり、この修士論文を私自身で改めてまとめ直したものが、「1．アムステルダムの成り立ち」である。

2004年、「東京キャナル・プロジェクト」が結成された。このプロジェクトは、オランダで活躍するランドスケープ・アーキテクト、アードリアン・グーズが率いるWEST8から若手建築家テレデザインへの、「水辺空間の再生をテーマにしたワークショップを東京でやらないか」という打診がきっかけで立ち上げられたものである。テレデザインの田島則行氏や久野紀光氏、キュレーターの寺田真理子氏をはじめとした東京チームとWEST8のオランダチームとのコラボレーションワークが、その後続けられていった。2004年夏に開催されたワークショップの準備に私も事務局スタッフとして参加し、オランダチームとの交流を持つことができた。プロジェクト自体はその後、数回の展覧会やシンポジウムを開催しながら、東京の水辺空間に関する活動を行っている。本報告書「4．水都・東京を考える」のなかで、プロジェクトについて簡単なレポートがあるので参照していただけたらと思う。

東京キャナル・プロジェクトにアドバイザーとして本研究所所長の陣内秀信先生も参加し、こうした一連の動きは、第2回ロッテルダム国際建築ビエンナーレ（2005年開催、アードリアン・グーズが総合キュレーターを務めた）における「東京湾」展を出展することへとつながった。ビエンナーレのオープニングに合わせてオランダ入りした「東京湾」展の実行委員は、ロッテルダムに滞在後アムステルダムへ移動し、オランダで活躍する日本人女性建築家の吉良森子氏のご案内により、東部港湾地区のハウジングを、地上と水上の両視点でもって見学することができた。ボート内では、東部港湾地区の再開発に関わったトン・スカープ氏からお話を伺うことができた。また、アムステルダム滞在中にはアイントホーフェン工科大学で教える建築家のイレーネ・クルッリ氏、アムステルダム市都市計画局のケース・ファン・ラウフン氏、アムステルダム市水管理部門で働くE. P. バイス氏といった、現場で活躍する方々に話を伺う時間を持つことができた。私自身は「東京湾」展実行委員会の事務局スタッフとして関わることができ、また、オープニングに合わせてオランダ入りした実行委員の皆さんに同行させていただくことができ、アムステルダムのウォーターフロント開発を見ていく上で非常に参考となった。

その後、2005年10月に東京で国際シンポジウム「東京エコシティ――水の都市の再生に向けて」を、会場提供をはじめ大塚商会の心強いサポートにより開催することとなった。このシンポジウムの基調講演として、ヴェネツィア建築大学教授であるマリノ・フォリン氏よりヴェネツィア、ケース・ファン・ラウフン氏よりアムステルダム、そして伊藤滋氏より東京、各都市のウォーターフロント事情についてお話をしていただいた。本報告書では、上記3都市のうちアムステルダムのウォーターフロント開発についての講演内容を、「2．水辺回帰　―ウォーターフロントは都市の知恵を明示する」のなかに掲載した。

基調講演の他、これからの東京のウォーターフロント開発の進むべき道を考えるべく、行政、建築家、市民など、多方面の方々による発表やパネルディスカッションが行われた。さらにはNPO法人地域交流センターのご協力により、Eボートに乗って都心の水辺を考えるというイベントが実施され、とても充実

したイベントとなった。このシンポジウムは２日間にわたって行われ、法政大学大学院に在籍する樋渡彩、細川雅紀、稲益祐太、榮美奈がレポートとしてまとめた。それらは本報告書の「４．水都・東京の水辺を考える」にて掲載されている。

2006 年３月、私は、デルフト工科大学建築学部教授であるハン・メイヤー氏が中心となって企画されたウォーターフロント開発をテーマとしたワークショップに参加する機会を得た。アムステルダム・アイブルグ地区へのボートツアーが実施され、市のアイブルグ地区担当の方よりアイブルグ地区の成り立ちについての話を伺いながら、出来たてホヤホヤの地区内を歩いた。

数回にわたるアムステルダム滞在中に行ったインタビューやレクチャーの内容、そして実際に現地を訪れることによってまとめられた文章は、本報告書「３．アムステルダムの水辺を探る旅」に掲載されている。それから、ロッテルダム国際建築ビエンナーレの「東京湾」展にて東京とオランダの間でコーディネーション役をしてくださった建築家の根津幸子氏からは、アムステルダムに浮かぶボートハウスで生活した貴重な体験談を寄稿していただいた。まさしく「水辺に住まう」ということを体験された根津氏のレポートは「３．アムステルダムの水辺を探る旅」に掲載されている。

アムステルダムの町と付き合っていく過程で感じることは、地形、都市空間、歴史などが、東京のそれらと似通っている部分が多いことである。ラウフン氏のテキスト上で述べられている独創性溢れる水辺の開発におけるアイディアは、社会システムや国民性の違いはあるものの、東京の水辺においても活用されうるのではないだろうか…、と感じずにはいられない。

オランダ・アムステルダムの町に出逢ってからこれまでの間、本当に沢山の方々にお世話になった。2000 年夏のオランダ調査時にコーディネーションをしてくださった後藤猛氏に、まずはお礼を申し上げたい。オランダに長く滞在し、長崎のオランダ村をつくるプロジェクトに参加し、オランダの建築物に関する知識の豊富な後藤氏のご助力がなければ、初めてのオランダ調査は充実なものとならなかっただろう。

2005 年５月にアムステルダムを訪れた際にボートツアーや専門家へのインタビューなどをアレンジしてくださった吉良森子氏にもお礼を申し上げたい。

早稲田芸術学校の笠真希氏には、ラウフン氏の講演内容の翻訳にあたって都市計画に関する専門用語やオランダ都市計画についてご教授くださり、お世話になった。お礼を申し上げたい。

また、私はオランダに数回滞在したのだが、そのうちの一回は、国際シンポジウム等でお世話になったケース・ファン・ラウフン氏がご自宅の屋根裏部屋を貸してくださるという幸運にもめぐり合った。ケースの奥さんであるアネミクは、スキポール空港まで迎えに来てくださったり、ご飯をご馳走してくださったりと、非常に気さくで親切な方であり、「オランダの母」のような方だった。とってもチャーミングな二人、ラウフン夫妻へは親愛の念とともに感謝の念を送りたい。

最後に、オランダにおける現代の都市開発に関する調査を行う機会を与えてくださった本研究所兼担研究員である高橋賢一先生にお礼を申し上げたい。また、完成に至るまで長い時間がかかってしまいながらも、こうしてアムステルダムという一つのテーマでもって報告書を作成するチャンスを与えてくださった陣内秀信先生と高村雅彦先生のお二人にもお礼を申し上げたいと思う。

法政大学大学院エコ地域デザイン研究所
研究所研究生　岩井桃子

法政大学大学院エコ地域デザイン研究所
所長　工学研究科建設工学専攻教授　陣内秀信

2004 年４月に、文部科学省学術研究高度化推進事業「学術フロンティア」の採択を受け、法政大学と共同で設立された５年間の任期付きの研究所である。

「環境の時代」を切り拓く、真の「都市と地域の再生」のための方法を研究することが研究所の目的である。特に、長い歴史のなかで豊かな環境を育みながら 20 世紀の「負の遺産」におとしめられた水辺空間を再生し、21 世紀の都市・地域づくりの大きな柱にすることを目指す。「水」と「都市」を対象に、「歴史」「エコロジー」「地域マネジメント」「再生」という四つのプロジェクトから構成されている。

東京キャナル・プロジェクト実行委員会
実行委員長　テレデザイン　田島則行

本プロジェクトは、「水の都市東京を再生する」ことをテーマに、江戸時代から引き継がれる河川・運河の機能、都市風景としてのあり方を再解釈し、東京の現代の都市環境・生活に相応しい、リアルで新しい「都市再生」の方法を具体的に提案していくものである。
様々な分野における専門家が一堂に会して多方面から「東京の水辺空間」に対して議論することで、「水」を鍵とする新たな都市再生の方法を専門家、地元住民、学生などとのコミュニケーションを通し、検討していくことを目的とする。

「５年、10 年後の東京の未来を見据えた、継続性・発展性のあるプロジェクト」、「社会との接点をもつ―地元との連携と異分野交流による提案」をプロジェクトの特徴としている。
また、「Waterscape ―「水」の景観」、「Urban design ―「水」の都市計画」、「Environment ―「水」の環境」の３つを、プロジェクトのテーマとして掲げ、東京の水辺空間の再生へと結びつけるものとする。

水都アムステルダム　― 歴史的経験と未来へのチャレンジ ―

Water City Amsterdam - past, present, and future -

2007 年 3 月 発行

編著
岩井 桃子（いわい・ももこ）
Kees van Ruyven（ケース・ファン・ラウフン）
根津 幸子（ねづ・ゆきこ）
樋渡 彩（ひわたし・あや）
細川 雅紀（ほそかわ・まさき）
稲益 祐太（いなます・ゆうた）
榮 美奈（さかえ・みな）

発行
法政大学大学院エコ地域デザイン研究所
東京キャナル・プロジェクト実行委員会

印刷
藤原印刷株式会社

連絡
法政大学大学院エコ地域デザイン研究所
〒 184-8584　東京都小金井市梶野町 3 － 7 － 2
Tel. 042-387-6365
eco-history@k.hosei.ac.jp
http://www.eco-history.com

Authors / Editors

Momoko Iwai	Laboratory of Regional Design with Ecology, Graduate School of Hosei University
ir. Kees van Ruyven	Projectmanagement Bureau, City of Amsterdam
Yukiko Nezu	Urbanberry / Architect
Aya Hiwatashi	Graduate School of Hosei University / University Iuav of Venice, Italy
Masaki Hosokawa	Graduate School of Hosei University
Yuta Inamasu	Graduate School of Hosei University / Universty of Bali, Italy
Mina Sakae	Graduate School of Hosei University

Printing
Fujiwara Printing co. ,Ltd. , Japan

© 2007 Laboratory of Regional Design with Ecology, Graduate School of Hosei University, Tokyo, JAPAN
http://www.eco-history.com
& Tokyo Canal Project planning committee, Tokyo, JAPAN
http://www.tokyocanal.org